東京大學

東洋文化研究所

要　覽　昭和63年度

東京大学東洋文化研究所
6413042760

INSTITUTE OF ORIENTAL CULTURE

UNIVERSITY OF TOKYO

1988

C3
45
10

東洋文化研究所要覧

目　次

Ⅰ　沿　革…… 1

Ⅱ　組　織，歴代所長，名誉教授，歴代事務長 …… 3

Ⅲ　職　員…… 5

Ⅳ　研究活動…… 9

A　部門研究 …… 9

B　昭和62・63年度研究計画 …… 22

C　定例研究会 …… 44

D　科学研究費による研究・特別事業費による現地研究……55

E　本学内教育参加 …… 58

F　外国出張 …… 63

G　外国人研究員等・内地研究員 …… 70

H　研究報告 …… 72

I　個人研究業績 …… 80

J　図　書 …… 99

K　資　料……102

Ⅴ　東洋学文献センター …… 105

〔付〕住所録 …… 111

I 沿　革

本研究所は昭和16年11月26日，東洋文化の総合的研究を目的として，東京（帝国）大学に付置創設された。当初は哲学・文学・史学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の3部門で，総合図書館内に研究室，書庫，事務室を置いて発足した。昭和24年，新たに3部門が増設されたのを機会に組織を細分化し，哲学・宗教部門，文学・言語部門，歴史部門，美術史・考古学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の6部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し，これまでの総合図書館内研究室を分室とし，研究の発展をはかった。

ついで昭和26年，人文地理学部門と文化人類学部門が加えられたが，アジア諸地域の基礎的研究の重要性が増大するに伴い，地域区分を軸とした将来計画のもとで，従来の諸科学の専門体系による部門構成を，汎アジア経済部門，汎アジア人文地理学部門，汎アジア文化人類学部門，東アジア政治・法律部門，東アジア歴史部門，東アジア美術史・考古学部門，東アジア哲学・宗教部門，東アジア文学部門の8部門に再編成し，さらに地域部門の増設計画を立てた。そして昭和35年には南アジア政治・経済部門，昭和39年には東北アジア部門，昭和43年には西アジア歴史・文化部門，昭和48年には東南アジア経済・社会部門，昭和53年には西アジア政治・経済部門が増設されて，ようやく13部門を擁するに至った。

なお昭和41年には，東洋学に関する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サーヴィスを目的として，東洋学文献

センターが付属施設として設置された。

本研究所の研究者は各々の専門に従った独自の課題のもとに研究活動を進めながら，しかし各専門分野の孤立を避け，アジア諸地域の総合的研究を推進するという所期の目的を達成するために，合同の研究会，各種研究班によって学際的研究を育て，また研究陣容の補強を図るため，学内外の専門研究者に研究を委嘱し，協力を求める方針をとってきた。

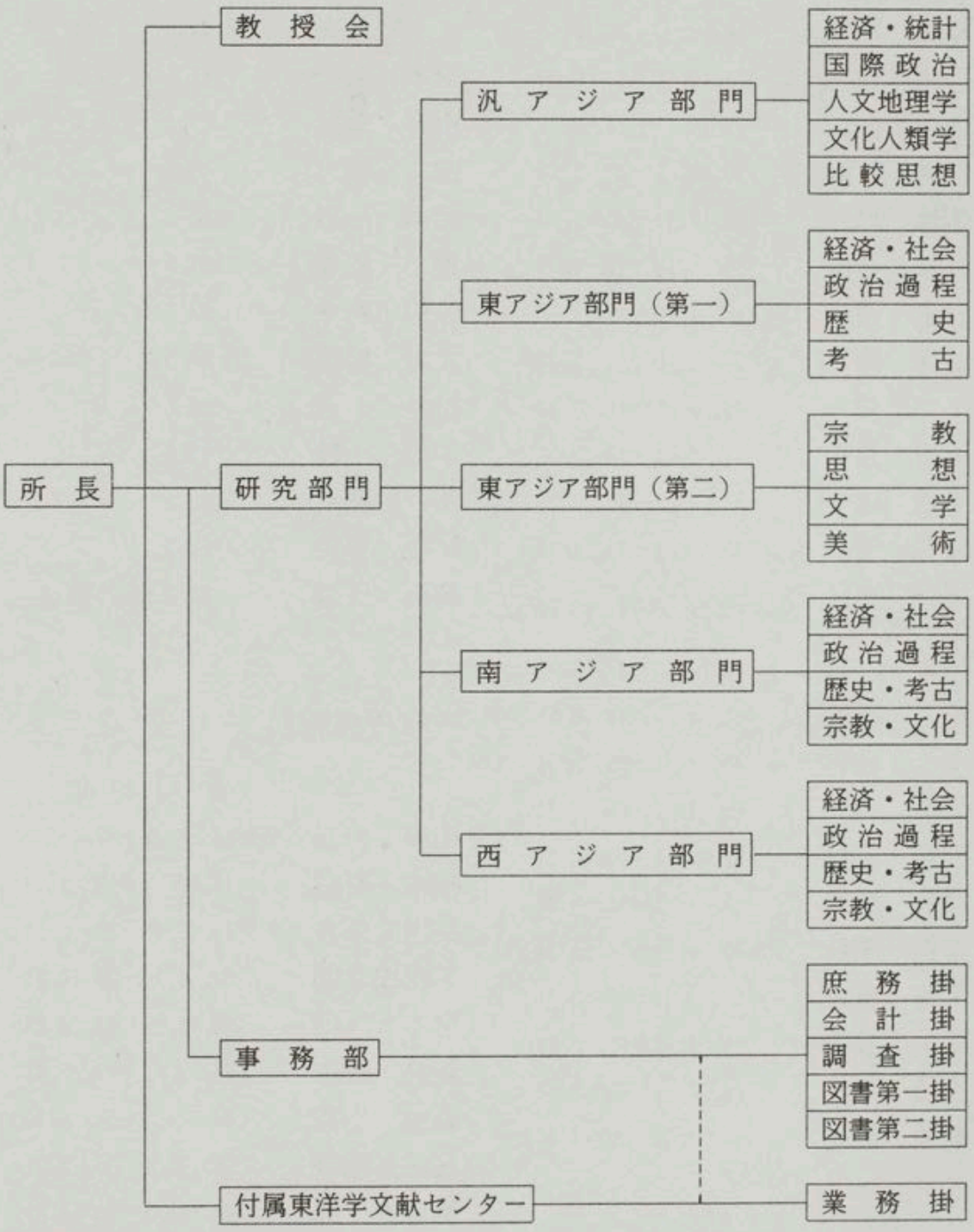
しかしながら，アジア諸地域全体が世界史的転換期に入った今日，本研究所が，わが国のアジア研究の中枢的，指導的役割を果たすために，研究内容の充実，規模の拡大を含む組織上の再編成をおこなうことが必要となった。そこで，昭和56年より新しい構想にもとづくいわゆる大部門制を採用し，これまでの13部門を，汎アジア部門，東アジア部門，南アジア部門，西アジア部門の４部門に統合し再出発することになった。

創立以来23年間にわたって，本研究所は総合図書館内研究室や外務省所管の建物に仮住いの状態のままであったが，昭和39年に，本郷構内に建物を新築する計画が具体化した。昭和39年から昭和42年にかけて工事がおこなわれて総合研究資料館との合同庁舎が完成し，５階以上を本研究所が使用することになった。

しかし，研究組織の拡充，研究活動の多様化，図書・資料の増加などに伴い，狭隘な施設の改善，とくに書庫の緊急整備等の強い要望があり，昭和52年から施設整備の必要性を強調してきた。昭和57年に至ってこれが認められ，総合研究資料館との交換分合により，本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これに伴って全面的に改修工事を行ない，昭和59年３月に工事が完了した。

本研究所の総面積は6,577平方メートルで，地下１階，地上８階からなる。３階までを所長室，事務室，図書室，東洋学文献センター，会議室，演習室等とし，４階以上は各研究部門の研究室である。なお地階から８階まで（２階を除く）の北西部分（約1,800平方メートル）は書庫にあてられている。

Ⅱ 組　　織


所長
教授会
研究部門
汎アジア部門
経済・統計
国際政治
人文地理学
文化人類学
比較思想
東アジア部門（第一）
経済・社会
政治過程
歴史
考古
東アジア部門（第二）
宗教
思想
文学
美術
南アジア部門
経済・社会
政治過程
歴史・考古
宗教・文化
西アジア部門
経済・社会
政治過程
歴史・考古
宗教・文化
事務部
庶務掛
会計掛
調査掛
図書第一掛
図書第二掛
付属東洋学文献センター
業務掛

歴代所長

氏名	在職期間
桑田　芳蔵	昭和16.11.26－18. 3.31
宇野　円空	18. 4. 1－21.10. 5
戸田　貞三	21.10. 6－22. 9.30
辻　直四郎	22.10. 1－29. 3.31
仁井田　陞	29. 4. 1－33. 7.10
飯塚　浩二	33. 7.11－35. 7. 9
結城　令聞	35. 7.10－37. 7. 9
江上　波夫	37. 7.10－39. 7. 9
飯塚　浩二	39. 7.10－40. 2.28
小口　偉一	40. 3. 1－41. 3.31
川野　重任	41. 4. 1－43. 3.31
小口　偉一	43. 4. 1－45. 3.31
泉　　靖一	45. 4. 1－45.11.15
川野　重任（事務取扱）	45.11.16－45.12.17
鈴木　　敬	45.12.18－47. 3.31
荒　　松雄	47. 4. 1－48. 3.31
窪　　徳忠	48. 4. 1－49. 3.31
佐伯　有一	49. 4. 1－51. 3.31
大野　盛雄	51. 4. 1－53. 3.31
深井　晋司	53. 4. 1－55. 3.31
中根　千枝	55. 4. 1－57. 3.31
大野　盛雄	57. 4. 1－59. 3.31
尾上　兼英	59. 4. 1－61. 3.31
山崎　利男	61. 4. 1－63. 3.31
斯波　義信	63. 4. 1－現在

名誉教授

氏名	称号授与年月日
米澤　嘉圃	昭和42.5
江上　波夫	42.5
橋本　秀一	45.5
川野　重任	47.5
窪　　徳忠	49.5
鈴木　　敬	56.5
荒　　松雄	57.5
佐伯　有一	58.5
大野　盛雄	60.5
松井　　透	62.5
中根　千枝	62.5
関　　寛治	62.5
尾上　兼英	63.5
鎌田　茂雄	63.5

歴代事務長

氏名	在職期間
山高　力三	昭和16.11.27－17. 9.30
根本　喜蔵	17.10. 1－19. 7. 9
長内太郎吉	19. 7.10－29. 7.15
工藤松之助	29. 7.16－38.10.31
宮本　　健	38.11. 1－44. 2.28
新井　康次	44. 3. 1－49. 3.31
斎藤　　益	49. 4. 1－52. 6.30
三浦　皓守	52. 7. 1－56. 3.31
伊東秀三郎	56. 4. 1－58. 3.31
岡部　藤男	58. 4. 1－61. 3.31
木内　義一	61. 4. 1－現在

Ⅲ 職　員

所長　斯波義信

汎アジア部門

山田三郎	教授（707室）
原　洋之介	助教授（611室）
猪口　孝	助教授（702室）
友杉　孝	教授（703室）
関本照夫	助教授（712室）
福嶋真人	助手（709室）

東アジア部門（第一）

斯波義信	教授（403室）
濱下武志	助教授（411室）
小島　毅	助手（413室）
池田　温	教授（402室）
宮嶋博史	助教授（410室）
松丸道雄	教授（407室）

東アジア部門（第二）

蜂屋邦夫	教授（508室）
吉田　純	助手（513室）
田仲一成	教授（511室）
戸田禎佑	教授（507室）
小川裕充	助教授（510室）

Ⅲ 職　　員

南アジア部門

加納啓良	助教授（607室）
土佐弘之	助　手（613室）
山崎利男	教　授（603室）
柳澤　悠	助教授（610室）
竹中千春	助　手（612室）
上村勝彦	助教授（602室）

西アジア部門

板垣雄三	教　授（811室）
鈴木　董	助教授（803室）
黒木英充	助　手（812室）
松谷敏雄	教　授（807室）
後藤　明	教　授（808室）
鎌田　繁	助教授（802室）
林　佳世子	助　手（813室）

事務部

事務長	木内義一
総務主任	増田仁吾

庶務掛

掛　長	道鎮正雄
事務官	益子一郎
事務官	安富　博
用務員	林　八重子

会計掛

掛　長	齋藤良雄
主　任	岡　徹
事務官	高野哲郎
事務官	瀬見千恵子
技　官	丸山　勉

調査掛

主　　任　木村源蔵
事務官　結城剛吉

図書第一掛

掛　　長　中村隆治
事務官　芳賀満子
事務官　長野　真
事務官　新居弥生

図書第二掛

掛　　長　松山靖夫
事務官　笠井伊里
事務官　吉澤秀彦
事務官　山口　淳

イラク・イラン遺跡調査室

技　　官　古山　学
技　　官　千代延恵正

東洋学文献センター

センター長（併）
斯波義信

センター主任（併）
戸田禎佑

助　　手　山之内正彦
業務掛長　中里富三男
事務官　畦浦美矢子
事務官　神田百合枝
事務官　渋谷義治

〔職員数〕（昭和63年4月1日現在）

教　　授	12名	助教授	11名	助　　手	8名
研究担当	24名	研究協力	87名		
事務官	23名	技　　官	3名	用務員	1名

〔昭和61年6月～63年5月　教職員の異動等〕

（教官）

昭和62. 1. 1	助教授	蜂屋　邦夫	教授（東アジア部門（第二））に昇任
62. 3. 31	教　授	中根　千枝	停年退職（汎アジア部門）
62. 3. 31	教　授	関　寛治	停年退職（汎アジア部門）
62. 3. 31	教　授	松井　透	停年退職（南アジア部門）
62. 3. 31	助　手	久保　亨	退職
62. 3. 31	助　手	上田　信	退職

62. 4. 1		関本　照夫	助教授（汎アジア部門）に配置換
62. 4. 1		小川　裕充	助教授(東アジア部門(第二))に配置換
62. 4. 1		小島　　毅	助手（東アジア部門（第一））に採用
62. 4. 1		黒木　英充	助手（西アジア部門）に採用
62. 5. 12	元教授	中根　千枝	名誉教授の称号授与
62. 5. 12	元教授	関　　寛治	名誉教授の称号授与
62. 5. 12	元教授	松井　　透	名誉教授の称号授与
62. 10. 1		後藤　　明	教授（西アジア部門）に配置換
昭和63. 3. 31	助　手	川崎　有三	退職（帝京大学助教授）
63. 3. 31	教　授	尾上　兼英	停年退職（東アジア部門（第二））
63. 3. 31	教　授	鎌田　茂雄	停年退職（東アジア部門（第二））
63. 4. 1	教　授	斯波　義信	所長に併任
63. 4. 1	助　手	大木　　康	広島大学講師に昇任
63. 4. 1	助　手	谷　　豊信	東京国立博物館研究員に転任
63. 4. 1		福嶋　真人	助手（汎アジア部門）に採用
63. 4. 1		林　佳世子	助手（西アジア部門）に採用
63. 5. 17	元教授	尾上　兼英	名誉教授の称号授与
63. 5. 17	元教授	鎌田　茂雄	名誉教授の称号授与

（事務官）

昭和62. 4. 1	会計掛長	高橋　長五郎	経理部管財課管財第一掛長に配置換
62. 4. 1	医科学研究所管理課研究助成掛長	齋藤良雄	会計掛長に配置換
63. 4. 1	総務主任	浅野　壽男	教養学部経理課課長補佐に昇任
63. 4. 1	医学部会計主任	増田　仁吾	総務主任に配置換

Ⅳ 研究活動

A 部門研究

汎アジア部門

関本　照夫　　福嶋　真人（昭和63年度より）
山田　三郎　　原　洋之介　　猪口　　孝
友杉　　孝
中根　千枝（昭和61年度まで）
関　　寛治（昭和61年度まで）
川崎　有三（昭和62年度まで）

汎アジア部門はアジアという対象を，文化人類学・経済学・政治学・人文地理学という社会科学の個別専門分野の理論と方法に深く関わりながら研究を深化させている。この部門では日本も重要な研究対象としている。

文化人類学研究分野は，アジア諸地域の社会・文化の比較研究を目的とし，ミクロな地域社会の日常生活をフィールドワークの手法でつぶさに明らかにする方法を主に用いて，下からあるいは周縁から，よりマクロな社会の全体像を見透そうとしている。

中根は，開発途上国問題をふくめてアジア諸社会を深く理解しうる社会科学の構築にむけての理論的研究をすすめている。特定地域の研究としてはイ

ンドを中心とした実態調査にもとづく研究につづき，文献資料と実態調査を合せ用いて中国のチベット系少数民族と漢民族の複合社会ならびにチベット社会の研究をおこなった。

関本は，インドネシアでの現地調査にもとづき，村落社会を律する社会関係の特質，さらに権威やヒエラルキーを支える観念と行為の特質を明らかにせんとしてきた。現在はさらに，東南アジア諸地域の政治体系と文化との係わりを，過去の王権と現代の国民国家の両面から研究している。

川崎は，以前に実施したマレーシアの潮州人漁村での調査にもとづき，東南アジアにおける漢人の村落の政治形態，儀礼，親族組織などに関して新しい分析方法を探究した。

福嶋は，同じくインドネシアでの調査にもとづき，制度的中心に対立するイスラムの運動や農民の抵抗運動を研究し，言語秩序と政治的・宗教的ヒエラルキーとの係わりを追求している。

経済・統計研究分野は，アジア諸国経済発展の実証的な比較研究をおこなっており，この研究を通じて，アジア諸国経済発展のアジア域内及び世界における国際的位置づけを明らかにするとともに，欧米で提起・展開された経済発展論の再検討を試みている。

山田は特にアジア諸国農業発展の比較分析をおこなっており，生産性・生産構造等の変化の実証分析を通じて，ヨーロッパその他の農業発展との対比の中で，国際的視野からアジアの農業発展についての分析を進めている。

原は，東南アジアに重点をおいて研究を進めており，同地域諸国における国民経済の形成を，タイ・インドネシア・フィリピン・ビルマの比較研究を通じて分析し，更に，東アジアや南アジアとの比較により，アジア経済の中での東南アジア経済の位置と特徴を明らかにするべく研究を進めている。

国際政治研究分野はアジアの国際政治の実証的・理論的な研究を精力的におこなっている。

関は世界全体での国際関係の展開の分析を通じて，アジア環太平洋地域で

の「平和」を維持しうる国際関係の構造的，過程的特徴を明らかにする研究をおこなっている。とくに世界の軍事化とそれを阻止する新しい発展の条件について，日本経済の地球大の下でのアジア諸国の実態の変容に即した規範的パラダイムのネットワークの型を解明することに努めた。

猪口は国際も国内も，政治も経済も合わせた視点で日本を中心とした主として東アジアの国際政治の研究をおこなってきている。第一に，日本の対外関係を中心としたもので『ただ乗りと一国繁栄主義をこえて』（1987年）と『現代日本の国際関係』（共編著，1987年）を出版した。後者の英語版はスタンフォード大学出版社から今年刊行する。又，現代日中関係の研究は今年中に完成を期して進めている。第二に，日本の国内政治と東アジア諸国の国内政治を中心としたものである。前者については『族議員の研究』（1987年）を出版した。又，現代日本政治を「国家と社会」の緊張関係からとらえなおした『国家と社会』を1988年５月に刊行する。また東アジアの政治体制の比較研究についての中間的な報告を同学諸氏とともに政治学学術誌『レヴァイアサン』で進めている。韓国，台湾，中国，日本などの東アジア諸国の政治体制を正統性獲得と社会剰余蓄積の観点から比較分析するものである。

人文地理学研究分野はアジア諸地域の記述，フイールド・ワークに基づく社会の全体像を描く。このような作業によって，あまりにも合理的なあるいは機能的な近代世界の相対化を目指す。したがって，狭く人文地理の枠に限定されることなく，むしろ広く隣接諸科学に関与する，脱領域の研究である。人文地理においては，限定された分野の精細な分析的研究は，同時に広く社会の全体像に収斂せねばならない。

友杉は，これまでおこなってきたタイ農村社会の研究にくわえて，スリランカの一地方都市ゴールについて記述しつつある。都市景観を手がかりにして，商業，社会統合，祭祀などが未分化のまま，あるいは相互に複雑に関与してつくる多様な意味の世界と現実世界の統一的な描写が求められている。このようなゴールの記述はこの都市の歴史的個性の把握の試みでもある。

ゴールでの試みをふまえて，ヨーロッパ都市の研究蓄積を参照しつつ，アジア諸都市の都市比較類型論が志向される。

東アジア部門（第一）

松丸　道雄　　池田　　温　　斯波　義信
小島　　毅（昭和62年度より）濱下　武志
宮嶋　博史　　久保　　亨（昭和61年度まで）
上田　　信（昭和61年度まで）
谷　　豊信（昭和62年度まで）

東アジア第一部門は，中国，朝鮮，日本，ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ，社会科学，歴史科学的方法によって過去から現在に至る動態を適確に把握することを目標とする。この研究では，とくに東アジア第二部門と協力して，学際的な地域研究による生きた全体像の把握をめざすことはいうまでもない。研究分野としては，経済・社会，政治過程，歴史，考古を包含し，「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として，共同研究を継続している。この部門では，「殷周時代の文物とその社会構造」「東アジア前近代官僚制の研究」「中国宋代の政治経済過程」「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」「朝鮮における社会変動と民衆」の５つの研究班を組織し，本学内外の研究者の協力を得て継続して研究をすすめている。

時代順に述べれば，考古学，古代史学の分野では，松丸は本研究所蔵の甲骨資料の整理分析をおこない，甲骨を綴合の上で分類し，2,103片の写真と拓本を『甲骨文字　図版編』として刊行し，その釈文の作成と研究にあたっている。また国内外の殷周青銅器を実物について調査し，近年までに蒐集し

た金文の写真資料のうち殷・西周のものの分類目録を刊行した。これらの基礎的作業を通じて，甲骨・金文の解釈や偽作問題につき新見解を発表し，その成果にもとづいて殷周時代の国家と社会構造を考究している。

谷は考古学的方法により，漢代の中国を中心に東アジアの古代史を研究している。日本国内所蔵の考古資料の調査・整理を通じて遺物研究を進める一方，文献と考古資料の対比による古代史の実証的研究をおこなった。近年は東北アジアの戦国～南北朝期の状況に焦点を置き，古朝鮮，楽浪郡，高句麗の歴史と文化を研究した。

池田は中国古代・中世史と東アジア前近代の文化交流史を研究し，唐代に至る現存籍帳を集めて検討考察し，『中国古代籍帳研究』を刊行した。また文書が多く発見されている敦煌・吐魯番の社会の歴史研究，および仁井田陞『唐令拾遺』の増補のため編纂作業を進めている。なお，笹山晴生を代表とする『続日本紀』の注釈の共同研究にも中国文献との関連の面から協力している。

斯波は宋元明中国の社会経済史並びに地域社会史の研究を進めており，『宋代江南経済史の研究』を刊行した。また，華人移住史に関して，長崎・函館・香港・台湾・オーストラリアなどの現地調査をもおこなった。その成果の一部に『函館華僑関係資料集』などがある。

小島は皇帝制秩序が維持された思想的基盤を宋代を中心に研究している。具体的には「天」に関する言説や儀礼を分析し，宋学の政治論などにおいて，王朝の統合原理がどのように理論化されていたかを解明すべく努力している。

明清以後現代に及ぶ問題については，上田は明清時代の社会史を専攻し，とくに江南社会の実態に迫るため，浙江省山間部を例として地域社会の定住経過，人口移動，宗族関係の変化などを細かく分析し，それを通じて地域史研究に新生面をひらこうとつとめた。在任中２年間南京大学に留学した。

濱下は19世紀を中心とする中国と欧米の経済関係の研究に従事し，海関資料・領事報告・中外の商工会議所報告などにもとづき，貿易および金融問題

の研究をすすめている。これに関連して，華人資本の海外活動の究明のため，香港・シンガポールなどで金融機関・商会の実施調査を実施した。また『仁井田陞博士輯北京工商ギルド資料集』を共編したほか，本研究所蔵の清代・民国初期地主文書の整理分析作業を継続しておこなっている。

久保は民国時代の経済史を専攻し，とくに財政，関税，幣制，労働問題などにつき統計資料の分析を進め，国民政府による関税政策決定過程について考察したほか，『中外経済周刊』『経済半月刊』『工商半月刊』『国際貿易導報』『中行月刊』５誌の記事目録を共編した。

宮嶌は朝鮮近代史を専攻し，土地調査事業を中心とした社会経済史の研究を進めている。87年度には半年余り韓国に滞在して，李朝後期の土地台帳や土地調査事業関係の史料の調査をおこなった。その成果に基づいて，現在は土地調査事業の政策立案過程に関する研究を進めている。

東アジア部門（第二）

蜂屋　邦夫　　吉田　　純　　田仲　一成
戸田　禎佑　　小川　裕充（昭和62年度より）
鎌田　茂雄（昭和62年度まで）
尾上　兼英（昭和62年度まで）
大木　　康（昭和62年度まで）

東アジア第二部門は，中国を中心とする東アジア地域の思想，宗教，美術を研究対象とする部門で，とくに「庶民文化の形成と展開」を研究課題として，各分野にわたって綜合的に研究することを目的としている。

一般に中国では，権力エリートと文化エリートは分離せずに癒着しており，

したがって権力エリートは文化を独占して，庶民は非文化的階層とみなされてきた。庶民は文化の獲得の努力を繰り返しておこない，権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは非正統的な文化とみなされ，同時に強く意識されなかったにせよ，そこには反権力的な指向をもっていた。これは中国文化のひとつの特質といえようが，その状況はかなり複雑である。「庶民文化」は六朝期から唐末までに形成され，宋元以後にはめざましく発展し各地方に広がっていったと考えられる。この課題に対して，各研究分野で独自の問題の検討を通じて考究し，共同して中国文化の特質の解明をめざしている。以下各分野の研究について述べる。

宗教・思想研究分野では，鎌田は中国仏教史の綜合的理解をめざし，仏教の伝来から中国的仏教の成立に至るまでの歴史について，儒学・道教との関係，庶民信仰と儀礼の面から再検討を加え，ついで隋唐仏教の研究をすすめた。それと同時に，中国仏教の実態の理解のため，中国・香港などの仏教寺院を継続して調査した。また韓国の仏教寺院についても調査をおこない，従来等閑視されてきた朝鮮仏教の重要性を明らかにして，その歴史を研究した。

蜂屋は六朝期を中心として儒仏道三教の思想とその間の交渉を研究している。思想の内在的理解のため文献の正確な読解に努めながら，とくに東晋時代の思想を検討した。さらに全真教など道教の思想についても考察し，現地における実情の研究にも着手している。さらに本学内外の専門家の参加を得て，『儀禮疏』の研究を推進し，「士冠疏」３巻，「士昏疏」３巻の訳注を完成しこれを刊行した。

吉田は85年４月入所以来，清代学術を主な関心の対象に研究を続けている。清朝考証学を中国思想史，中国精神文化史の一環として捉える立場にたち，最近では，清代学術が整備された学問体系として確立してゆくことと並行して，その対象となる儒教経典の「聖経」としての地位がどのように保持されてゆくか，という視角から，閻若璩，朱彝尊，段玉裁，崔述ら清朝初期から中期にかけての古典学者達の学問の分析を進めている。

次に文学の分野では，古来，稗官小説流として蔑視された民間文学はエリートの正統文学に対立して存在していたが，六朝期以後，説話・歌謡などのジャンルを分岐させつつ，権力批判的指向の強い文学を形成していった。この流れは唐宋以後，質的には正統文学をむしろ凌ぐ勢で，戯曲・小説を展開させ，近世初期から近代に至る。文学研究所分野ではこの展開過程を考察することを課題としている。

尾上は中国小説史を研究し，明清の白話小説の考察を中心に小説の源流をたどり，これと関連して明清以後の説書，説唱演芸の研究をすすめ，日本や東南アジアの華人社会の演芸・芸能の実態調査をもおこなった。このほか，1930年代左翼文芸運動の総合的研究を所外の研究者とともに継続しておこなった。

田仲は中国の地方演劇史を研究し，宋元より明清に至る地方演劇の記録を詳細に調べ，中国の祭祀演劇の歴史を構成しようとしている。とくにこの数年来，香港，台湾，シンガポール，マレーシア等に見られる華南（閩粤）系演劇の調査を連続しておこない，文献資料との関連を考察している。また閩粤社会全体に視野を広げる必要から，他分野の専門家の協力を得て『華南の地域社会と地方文学』について綜合的な検討を試みている。

大木は尾上と同じく中国の小説史，芸能史を研究対象としているが，主として明清小説の社会的担い手の問題を追求している。さしあたり明末の文人馮夢竜のおこなった白話小説や山村歌謡の採集・編集の活動を手掛りとして，明清間の文人層と民間文学・民間芸能の関係を分析検討した。

美術研究分野では，長年にわたって国内や欧米など諸外国に現存する中国絵画を調査し，その写真史料を蒐集してきた。それらの目録と図録とを既に刊行したので，現在はその補足調査を継続している。また，既に刊行済みの上記作品目録をデータ・ベース化して，個々の作品の画像処理をも含めた中国絵画研究資料システムを構築する準備を進めている。戸田・小川の両名は，これらの基礎的作業を共同しておこなう一方，戸田は宋元の羅漢十王図を中

心とする仏画と元代道釈画とを研究し，小川は唐宋時代から元代の山水画を主な研究対象として，宋元絵画に表れた庶民的要素の意義を人物画・山水画の両面から考察している。

南アジア部門

山崎　利男　　竹中　千春　　柳澤　　悠
加納　啓良　　土佐　弘之　　上村　勝彦
松井　　透（昭和61年度まで）

南アジア部門は，東南アジア諸国からインド亜大陸までの地域を研究の対象とする。その地域は多様な言語と文化をもつ人びとが複雑な社会を形成したうえ，欧米諸国による植民地支配のもとでの苦い経験を経て，戦後にあいついで独立した諸国からなる地域であるので，今日の事情を理解するのは決して容易なことではない。この理解のため，本部門は政治，経済，社会，文化などにわたって過去現在の両者を綜合的に研究している。

本部門では，とくに「南アジアの伝統と社会変動および民衆意識」を課題として研究を進めてきた。このため，所外の研究者の協力を得て研究班を組織し，それぞれ新しい角度から問題を提起し，それについて実証的かつ理論的に検討をおこなっている。

政治・法律研究分野では，山崎はイギリスのインド植民地支配のもとでの法制度の樹立・発展について研究している。この研究は，イギリス側の立法経過，およびインド社会事情とインド人法律家・民族運動家などの対応を検討して，従来の法制史を再検討しようとするものである。またイギリス政府保管文書集を主たる資料としてインド・パキスタン分離独立の法的側面を考察し，独立後のインド憲法とヒンドゥー法の歴史についても独立前の問題と

関連して考察している。

竹中は両大戦間のインド政治を研究する中で，イギリス支配下の植民地インドに特有の政治体制と，それに代わるべき独立インドの新体制構築をにらんだ，さまざまな政治集団・運動の連合および競合としてのナショナリズムに注目して，インド政治のダイナミックスを分析した。さらに，第二次大戦直後の英領インドにおける「権力移譲」という「非植民地化」の政治過程についての研究をまとめる途上にあり，またこれとの関わりで，同じ時期の大英帝国の解体と「パレスティナ問題」について研究している。

経済研究分野では，松井は19世紀後半から20世紀はじめにかけての北インドの経済史を研究し，詳細な統計資料を分析して農業発展と農村生活の変化について考察を加えた。この研究を拡大して，ガンジス流域での農業技術の進歩，農産物の商品化とその農村社会に与えた影響を研究した。

柳澤は，19世紀以降の南インド農村について，主として地税関係公文書を資料として土地所有と農村内諸階層の変化を中心に，検討してきた。近年，南インドの１つの郡の約60村の村落地税台帳を電算機に入力・集計するほか，それを分析し，19世紀後半から20世紀前半にかけてのこの地域のカースト関係と土地所有構造の変容について，通説を批判的に検討しつつ，構造的に把握しようと試みた。

東南アジアに関しては，加納はインドネシアの経済を研究し，かつて現地調査をおこなったジャワ農村を再調査し，土地所有，農業労働，労働移動に焦点をおいて，ジャワの農業発展と社会変容を考察している。これと関連して，植民地支配下のジャワ糖業を分析してきたが，さらにオランダにおいて植民地時代の資料を収集し，19世紀から20世紀にかけてのジャワ経済史の分析をおこないつつある。

土佐は，権威主義政治体制の制度化と崩壊を研究テーマとして，特にインドネシアの学生運動，武力分離運動についての研究をすすめている。同時に東南アジアに限定しない，より広い比較政治社会学視点から，政治的民主化

に関する研究をもおこなっている。

宗教・文化の分野では，上村は，バラタに帰せられる演劇論書『ナーティヤ・シャストラ』のラサ（美的経験）についての章，及びそれに対するアビナヴァグプタの難解な注釈書の全貌を解明し，それを論文にまとめた。目下，『ドゥヴァニ・アーローカ』の研究をするとともに，『マハーバーラタ』の翻訳及びケーララの演劇を改革した詩人クラシェーカラ・ヴァルマンの研究に従事している。

西アジア部門

板垣　雄三　　鈴木　　董　　黒木　英充（昭和62年度より）
松谷　敏雄　　後藤　　明（昭和62年10月より）
鎌田　　繁　　林　佳世子（昭和63年度より）

西アジア部門は，アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域，いわゆる中近東を研究対象とし，あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。この地域の遠い過去から現在に及ぶ複雑な文化と社会を学際的研究によって把握することが本部門の目標である。

西アジア地域は，古代文明の発祥の地として，またその後の長い歴史過程における東西文化交流の結節点として，世界史上に重要な位置を占めてきた。同時に，世界の三大宗教と呼ばれるキリスト教，ユダヤ教，イスラム教などが生まれた地である。とくにイスラム教はこの地域を根幹とし，広く諸地域に滲透して多大な影響を及ぼしている。したがって，現在の世界の政治，経済，社会，文化にかかわる多角的な諸問題は，国際的見地からみても，とりわけ西アジア地域に集約的に現れているのである。本部門は以上の諸問題をいくつかの専門分野で共同に研究を推進している。

経済・政治の分野には，板垣，鈴木，黒木が所属している。板垣はアラブ近代史に関して従来おこなってきた研究を踏まえつつ，現代中近東の政治・社会変動の機構を解明しようとする作業に従事してきた。そこでは，政治過程に作用する当該地域諸社会の集団編成原理ならびに価値意識の変化を重視し，また国際関係と社会過程との間の構造的連関に着目しながら，パレスティナ民族主義，イスラム復興運動などの展開について考察している。なお湾岸地域の社会変動を記述し分析するための指標の検討をもその一環としておこなっている。

鈴木はオスマン帝国史を専攻し，政治学的視点から帝国の政治・社会体制を研究した。とくに前近代における高級官人の変遷過程を分析して，軍事・行政制度と高級官人を輩出する階層の変容の実態を明らかにするとともに，実務官人層の出現とその役割を論じた。また国際政治学の視点から，現代西アジアにおけるアイデンティティの変容と国際紛争について若干の考察をおこなっている。

黒木は東アラブ地域，中でもレバノン，シリアの地域を対象にして，近代における社会変動の問題を研究している。この複合的構成の地域社会において，今日見られるような紛争がいかにして生起していたかを明らかにすべく，政治・社会史的視点から分析を進めている。

次に，歴史・考古の分野では，松谷が西アジアにおける農耕・牧畜という食料生産経済の開始に関して研究をしている。これは，昭和31年より本研究所が主宰してきた「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」の現地研究を引き継ぐものであり，両国における発掘調査をふまえ，近年の国際情勢の変化に伴ない，イラクに隣接するシリアにフィールドを移し，実証的に考究しようとするものである。

宗教・文化の分野には，後藤，鎌田，林が所属している。後藤は，従来おこなってきたムハンマド伝の研究およびムハンマド時代のアラブ社会・文化の研究をふまえて，それを発展させ，一方でイスラームの思想の枠組みが形

成されてきた過程を歴史的に分析を試みた。

鎌田はイスラムの宗教思想研究に携わりイスラムの伝統的思想家の思索の枠組を把握しその特質を明らかにすることを目指して，イラン・シーア派（十二イマーム派）の神秘主義的哲学者モッラー・サドラーの霊魂観及び世界観を明らかにしようと努めている。

林はイスラム都市社会史を専攻し，オスマン朝期のイスタンブルを対象として，その社会構造に関する研究をおこなっている。とくにワクフの問題に着目し，関連史料の基礎的研究をおこなうとともに，イスラム都市形成に果したワクフ制度の役割について考察を進めている。

B　昭和62年度研究計画

〔部 門 研 究〕

汎アジア部門　　アジア諸地域における社会・文化の変容過程

Ⅰ．アジア諸社会の固有文化とその変容

1．松谷　敏雄　　アジアの先史時代における農耕村落の研究

2．関本　照夫　　インドネシア社会の統合過程

3．川崎　有三　　東南アジアにおける中国系社会の研究

Ⅱ．アジア諸国経済発展の比較研究

4．山田　三郎　　アジア農業発展の国際比較

5．原　洋之介　　アジア諸国の工業化と国際貿易

Ⅲ．アジアにおける政治変動と国際関係

6．猪口　　孝　　西太平洋諸国における政治経済変動と対外政策

Ⅳ．アジアにおける都市と農村

7．友杉　　孝　　日本とタイとスリランカの比較研究

東アジア部門

Ⅰ．東アジアにおける国家権力と社会経済構造

1．松丸　道雄　　中国古代国家の形成

2．谷　　豊信　　東北アジア諸地域の国家形成

3．池田　　温　　東アジア前近代国制の比較史

4．小島　　毅　　唐宋時代の皇帝制秩序

5．斯波　義信　　宋元時代の社会経済構造

6．濱下　武志　　中国近代の経済発展

7．宮嶌　博史　　近代朝鮮の社会経済構造

Ⅱ．東アジアにおける庶民文化の形成と展開

8．鎌田　茂雄　　庶民信仰の宗教形態

9．蜂屋　邦夫　　庶民における三教思想の受容

10．吉田　　純　　明清の儒学

11．尾上　兼英　　明清の説書・説唱演芸

12．田仲　一成　　明清の地方劇

13．大木　　康　　明清の芸能・小説

14．戸田　禎佑　　宋元の民間画工

15．小川　裕充　　明清の職業画家

南アジア部門　　南アジアにおける支配体制と社会構造

1．上村　勝彦　　古代インドの文学と社会

2．山崎　利男　　古代インド社会の変貌

3．柳澤　　悠　　近現代インドの経済構造

4．竹中　千春　　近現代インドの政治構造

5．加納　啓良　　インドネシアにおける植民地支配と農業問題

6．山田　三郎　　東南アジア農業社会の比較研究

7．原　洋之介　　東南アジアの支配体制と経済発展

8．土佐　弘之　　東南アジアの社会変動と権力構造

西アジア部門　　西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

1．板垣　雄三　　イスラム国家論

2．鈴木　　董　　オスマン帝国の政治社会史的研究

3．黒木　英充　　近代西アジア都市史の研究

4．松谷　敏雄　　北シリアにおける農耕・牧畜の起源について

5．鎌田　　繁　　イスラム神秘思想の構造と展開

〔班 研 究〕

アジア諸社会における国家と伝統的政治体系

主任 関 本

1．関本 照夫　インドネシアの伝統的国家と政治体系
2．川崎 有三　マレーシア国家と中国人社会
3．富沢 寿勇　マレー世界の伝統的王権
4．田村 克巳　ビルマ国家と伝統的政治体系
5．伊藤 亜人　朝鮮における国家と王室
6．船曳 建夫　オモアニア島嶼国家と伝統的政治体系
7．栗田 博之　パプア・ニューギニア国家と伝統的政治体系

アジア農村の現地研究の方法と過程

主任 友 杉

1．宮口 侗廸　山村の構造―日本―
2．友杉 孝　むらと水利―タイ―
3．堀井 健三　米作農村と土地所有―マレーシア―
4．茨口 善美　村落と農業―インド，バングラデシュ―
5．中村 尚司　共同体と水利―スリランカ―
6．後藤 晃　灌漑農業論―西アジア―

アジアにおける農村開発と農村工業

主任 山 田

1．山田 三郎　アジアにおける農業開発と農村工業の展開
2．原 洋之介　東南アジア諸国の農村工業
3．藤田 夏樹　アジア農村における労働市場の構造
4．本台 進　アジアにおける農村開発と部門間資源移動
5．米倉 等　インドネシアの農村開発と農村工業

6．南　亮進
7．牧野　文夫　　日本の戦前期の農村電化とその経済的意義

8．清川　雪彦
9．大野　昭彦　　季節労働市場としての農村工業の意義 —インドの場合を中心として—

東アジア・東南アジア政治体制比較

主任　猪口

1．猪口　孝　　東アジア・東南アジア政治体制比較
2．徳田　教之　　中国の政治構造
3．石井　明　　中国の内政と外交
4．国分　良成　　中国の政治過程
5．若林　正丈　　台湾の社会と政治
6．古田　元夫　　ベトナムの民族と政治
7．白石　昌也　　ベトナムの国家と社会
8．小此木政夫　　朝鮮半島の政治外交過程
9．伊豆見　元　　韓国の政治過程
10．土佐　弘之　　フィリピンの経済と社会

植民地体制と農業の商業化

主任　柳　澤

1．濱下　武志　　中国
2．宮嶌　博史　　朝鮮
3．加納　啓良　　インドネシア
4．原　洋之介　　タイ・マレーシア
5．柳澤　悠　　インド
6．友杉　孝　　スリランカ
7．加藤　博　　エジプト

Ⅳ 研 究 活 動

殷周時代の文物とその社会構造

主任　松　丸

1．松丸　道雄　　殷周青銅器の製作事情とその国家構造
2．持井　康孝　　窖蔵青銅器から見た殷周時代の社会構造
3．飯島　武次　　殷周時代の玉器と青銅器との関わり
4．量　　博満　　倣銅土器製作の社会的背景
5．豊田　　久　　殷周出土文字資料から見た君主権の構造
6．武者　　明　　殷周時代の策命制度
7．平勢　隆郎　　殷文化と楚文化
8．谷　　豊信　　殷周文化と東北古代文化

六朝思想の総合的研究

主任　蜂　屋

1．蜂屋　邦夫　　六朝における儒家思想
2．戸川　芳郎　　経典解釈史からみた六朝義疏
3．影山　輝国　　六朝における経学の展開
4．吉田　　純　　六朝時代の経典解釈学
5．小島　　毅　　六朝の礼思想
6．澤田多喜男　　六朝における道家思想の展開
7．高橋　忠彦　　道教思想の形成過程
8．原田　二郎　　道教思想と中国医学
9．丘山　　新　　仏典の翻訳と伝統思想
10．末木文美士　　六朝思想に与えた仏教の思想
11．菅野　博史　　六朝思想における仏性思想
12．坂本ひろ子　　伝統思想と仏教
13．藤本　幸夫　　朝鮮文献よりみた中国伝統思想

中国仏教思想の形成過程

主任　鎌　田

1．蜂屋　邦夫　　形成期の中国仏教思想
2．福井　文雅　　道教思想の形成と仏教
3．平井　俊栄　　三論思想の形成過程
4．池田　魯参　　天台思想の形成過程
5．鎌田　茂雄　　唐代仏教史の諸問題
6．江島　恵教　　中観思想の中国的変異
7．袴谷　憲昭　　唯識思想の中国的変異
8．木村　清孝　　華厳思想の形成過程
9．吉津　宜英　　華厳と禅との交流
10．石井　修道　　禅思想の形成過程

東アジア前近代官僚制の研究

主任　池　田

1．太田　幸男　　秦漢官吏支配の形成
2．福井　重雅　　漢代官吏登用制度の形成と構造
3．工藤　元男　　秦漢官僚制の構造
4．尾形　　勇　　中国古代国家構造と官人支配
5．池田　　温　　隋唐官人制の構造と特質
6．岡野　　誠　　中国律令と官僚支配
7．小島　　毅　　唐宋時代の士人
8．佐竹　靖彦　　宋元時代の官僚制度
9．斯波　義信　　宋代の行政・財政と社会経済
10．小口　彦太　　中国伝統官僚制の解体
11．西澤奈津子　　職員令の構成と性格
12．高塩　　博　　日本律令官人の法制と特質

13. 石上　英一　　日本律令官制の形成と展開

華南の地域社会と地方文学

主任　田　仲

1．尾上　兼英　　広東の民謡（木魚書）
2．田仲　一成　　広東の演劇（粤劇，潮劇，恵劇）
3．濱下　武志　　広東の経済と地域社会
4．片山　　剛　　広東の村落
5．戸倉　英美　　広東の民謡（山歌）と民話
6．西川喜久子　　広東の宗族
7．平山　久雄　　閩粤の言語
8．王　嵓　興　　閩粤の習俗
9．大里　浩秋　　閩粤の秘密結社
10．斯波　義信　　閩越発展の地域構造
11．岡本　サエ　　閩浙の文人結社
12．大木　　康　　蘇浙の説唱

17世紀以降アジア公私文書の総合的研究

主任　濱　下

1．濱下　武志　　17世紀以降東アジア経済の展開―欧米の公私文書分析を含めて―
2．岸本　美緒　　明清期経済の動態と意識の構造
3．上田　　信　　明清契約文書より見た社会関係
4．寺田　浩明　　明清期の契約法慣習の論理
5．臼井佐知子　　清末契約文書の社会経済史的分析
6．リンダ•グローヴ　民国時代公私文書より見た農村経済
7．久保　　亨　　民国時代公私文書より見た経済構造

8．宮嶌　博史　　朝鮮近代公私文書の社会経済的分析

現存する中国絵画の包括的再検討

主任　戸　田

1．戸田　禎佑
2．小川　裕充
3．海老根聡郎
4．嶋田　英誠
5．関口　正之
6．湊　　信幸
7．宮崎　法子

特に専門別の分担を定めず、本年は道釈画に関する検討、調査を重点的に行う。

1930年代左翼文芸運動

主任　尾　上

1．尾上　兼英　　左翼文芸運動における民間形式の発掘と継承
2．芦田　　肇　　日本プロレタリア文芸理論と左翼文芸運動
3．尾崎　文昭　　北京文壇からみた上海の左翼文芸運動
4．近藤　龍哉　　左翼作家連盟東京支部
5．佐治　俊彦　　左翼作家連盟に影響をあたえた諸思潮
6．丸山　　昇　　３０年代左翼文芸運動における魯迅
7．溝口　雄三　　左翼文芸運動の思想史的背景

朝鮮における社会変動と民衆―李朝期から近代まで―

主任　宮　嶌

1．武田　幸男　　李朝後期の身分制とその変動
2．吉田　光男　　李朝戸籍を通じてみた社会変動
3．吉野　　誠　　李朝後期の国家財政と社会変動

4．山内　弘一　　李朝後期の地方財政
5．小川　晴久　　ソンビと実学
6．梶村　秀樹　　1910年代の社会経済変動
7．宮嶌　博史　　土地調査事業と農村構造の変動
8．尹　健　次　　朝鮮民衆運動における民族意識と国家意識
9．馬渕　貞利　　近代朝鮮農村の変容相
10．宮田　節子　　1920年代の地方支配と府・面協議会
11．姜　徳　相　　独立運動における社会主義と民族主義

南アジアにおける社会構造と伝統文化

主任　柳　澤

1．山崎　利男　　北インドにおける社会構造と法
2．辛島　　昇　　南インドにおける社会構造と文化
3．長崎　暢子　　北インドにおける民衆意識と政治的行動
4．中里　成章　　ベンガル農村における経済変動と下層民衆
5．柳澤　　悠　　南インド農村における社会変動と下層民衆
6．奥平　龍二　　ビルマの国家と伝統法
7．石井　米雄　　タイの民族形成と伝統文化
8．井東　　猛　　インドネシアの諸国家と伝統文化

南アジアにおける社会変動と民衆意識

主任　加　納

1．加納　啓良　　インドネシアの社会変動と農村構造
2．土屋　健治　　インドネシアにおける社会変動と民衆意識
3．土佐　弘之　　フィリピン・インドネシアの経済開発と都市民衆
4．古田　元夫　　ベトナムにおける社会階層と民衆意識
5．白石　昌也　　ベトナム農村社会の変動と民族形成

6．友杉　　孝　　タイの社会変動と民衆意識
7．末廣　　昭　　タイにおける資本蓄積と社会階層
8．古賀　正則　　北インドにおける経済変動と下層民衆
9．佐藤　　宏　　北インド米作地帯の経済変動と農民生活
10．竹中　千春　　近代インドの政治と民衆
11．中村　平次　　インド亜大陸における諸民族形成

アジア都市比較の課題と方法

主任　友　杉

1．陣内　秀信　　江戸・東京の都市空間の特質
2．斯波　義信　　中国中近世の都市
3．生田　　滋　　東南アジア前近代における都市の形成と人口移動
4．友杉　　孝　　タイ・スリランカの地方商業都市
5．坂本　　勉　　近代イラン・トルコ都市の比較
6．鈴木　　董　　近世トルコの都市
7．本村　凌二　　古代地中海都市の特質

アジアのイスラム

主任　板　垣

1．板垣　雄三　　現代のイスラム国家論
2．鈴木　　董　　トルコ・イスラム社会の研究
3．黒木　英充　　都市民衆意識とイスラム
4．松谷　敏雄　　西アジアの基層文化
5．鎌田　　繁　　イラン伝統文化における宗教思想
6．加納　啓良　　ジャワ農村のイスラム
7．中村廣治郎　　中世イスラムと政治
8．佐藤　次高　　イスラム社会経済史研究

9．小田　淑子　　初期イスラム社会における法
10．加藤　　博　　近代エジプトの農村社会研究

アジアの宗教制度と儀礼

主任　山　崎

1．鎌田　茂雄　　華人社会における仏教儀礼と習俗
2．田仲　一成　　道教儀礼と演劇
3．関本　照夫　　ジャワにおける外来宗教と土着主義的統合
4．上村　勝彦　　古代インドの宗教制度と演劇
5．山崎　利男　　ヒンドゥー寺院の財産管理
6．鎌田　　繁　　イスラム神秘主義における儀礼

昭和63年度研究計画

〔部 門 研 究〕

汎アジア部門　　アジア諸地域における社会・文化の変容過程

Ⅰ．アジア諸社会の固有の文化とその変容

1．松谷　敏雄　　アジアの先史時代における農耕村落の研究
2．関本　照夫　　インドネシア社会の統合過程
3．福嶋　真人　　東南アジアにおける言語・権力・宗教の研究

Ⅱ．アジア諸国経済発展の比較研究

4．山田　三郎　　アジア農業発展の国際比較
5．原　洋之介　　アジア諸国の工業化と国際貿易

Ⅲ．アジアにおける政治活動と国際関係

6．猪口　　孝　　西太平洋諸国における政治経済変動と対外政策

Ⅳ．アジアにおける都市と農村

7．友杉　　孝　　日本とタイとスリランカの比較研究

東アジア部門

Ⅰ．東アジアにおける国家権力と社会経済構造

1．松丸　道雄　　中国古代国家の形成

2．池田　　温　　東アジア前近代国制の比較史

3．小島　　毅　　唐宋時代の皇帝制秩序

4．斯波　義信　　宋元時代の社会経済構造

5．濱下　武志　　中国近代の経済発展

6．宮嶋　博史　　近代朝鮮の社会経済構造

Ⅱ．東アジアにおける庶民文化の形成と展開

7．蜂屋　邦夫　　庶民における三教思想の受容

8．吉田　　純　　明清の儒学

9．田仲　一成　　明清の地方劇

10．戸田　禎佑　　宋元の民間画工

11．小川　裕充　　明清の職業画家

南アジア部門　　南アジアにおける支配体制と社会構造

1．上村　勝彦　　古代インドの文学と社会

2．山崎　利男　　古代インド社会の変貌

3．柳澤　　悠　　近現代インドの経済構造

4．竹中　千春　　近現代インドの政治構造

5．加納　啓良　　インドネシアにおける植民地支配と農業

6．山田　三郎　　東南アジア農業社会の比較研究

7．原　洋之介　　東南アジアの支配体制と経済発展

8．土佐　弘之　　東南アジアの社会変動と権力構造

西アジア部門　　西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

1．板垣　雄三　　イスラム国家論

2．鈴木　董　　オスマン帝国の政治社会史的研究
3．黒木　英充　　近代西アジア都市史の研究
4．松谷　敏雄　　北シリアにおける農耕・牧畜の起源について
5．後藤　明　　初期イスラム社会史
6．鎌田　繁　　イスラム神秘思想の構造と展開
7．林　佳世子　　オスマン朝都市研究

〔班　研　究〕

アジア諸社会における国家と伝統的政治体系

主任　関　本

1．関本　照夫　　インドネシアの伝統的国家と政治体系
2．川崎　有三　　マレーシア国家と中国人社会
3．富沢　寿勇　　マレー世界の伝統的王権
4．田村　克巳　　ビルマ国家と伝統的政治体系
5．伊藤　亜人　　朝鮮における国家と王室
6．船曳　建夫　　オセアニア島嶼国家と伝統的政治体系
7．福嶋　真人　　インドネシアにおける国家と農民
8．山下　晋司　　インドネシアにおける国民国家と辺境
9．木内　裕子　　台湾漢人に見る中華と辺境

アジア農村の現地研究の方法と過程

主任　友　杉

1．宮口　侗廸　　山村の構造―日本―
2．友杉　孝　　むらと水利―タイ―
3．堀井　健三　　米作農村と土地所有―マレーシア―
4．茨口　善美　　村落と農業―インド，バングラデシュ―

5．中村　尚司　　共同体と水利―スリランカ―
6．後藤　　晃　　灌漑農業論―西アジア―

アジアにおける農村開発と農村工業

主任　山　田

1．山田　三郎　　アジアにおける農業開発と農村工業の展開
2．原　洋之介　　東南アジア諸国の農村工業
3．藤田　夏樹　　アジア農村における労働市場の構造
4．本台　　進　　アジアにおける農村開発と部門間資源移動
5．米倉　　等　　インドネシアの農村開発と農村工業
6．南　　亮進
7．牧野　文夫　　日本の戦前期農村電化とその経済的意義
8．清川　雪彦
9．大野　昭彦　　季節労働市場としての農村工業の意義 ―インドの場合を中心として―

東アジア・東南アジア政治体制比較

主任　猪　口

1．猪口　　孝　　東アジア・東南アジア政治体制比較
2．徳田　教之　　中国の政治構造
3．石井　　明　　中国の内政と外交
4．国分　良成　　中国の政治過程
5．若林　正丈　　台湾の社会と政治
6．古田　元夫　　ベトナムの民族と政治
7．白石　昌也　　ベトナムの国家と社会
8．小此木政夫　　朝鮮半島の政治外交過程
9．伊豆見　元　　韓国の政治過程
10．土佐　弘之　　フィリピンの経済と社会

植民地体制と農業の商業化

主任　柳　澤

1．濱下　武志　　中国
2．宮嶌　博史　　朝鮮
3．加納　啓良　　インドネシア
4．原　洋之介　　タイ・マレーシア
5．柳澤　　悠　　インド
6．友杉　　孝　　スリランカ
7．加藤　　博　　エジプト

殷周時代の文物とその社会構造

主任　松　丸

1．松丸　道雄　　殷周青銅器の製作事情とその国家構造
2．持井　康孝　　窖蔵青銅器から見た殷周時代の社会構造
3．飯島　武次　　殷周時代の玉器と青銅器との関わり
4．量　　博満　　倣銅土器製作の社会的背景
5．平勢　隆郎　　殷文化と楚文化
6．谷　　豊信　　殷周文化と東北古代文化

甲骨文の総合的研究

主任　松　丸

1．豊田　　久　　甲骨文から見た王権の性格
2．武者　　章　　甲骨文から見た殷代官制
3．石田　千秋　　甲骨文に見える祭祀の特質
4．持井　康孝　　甲骨文と殷代王族
5．松丸　道雄　　安陽甲骨と周原甲骨

六朝隋唐思想の総合的研究

主任　蜂　屋

1．蜂屋　邦夫　　六朝隋唐における儒家思想
2．戸川　芳郎　　経典解釈史からみた六朝義疏
3．影山　輝国　　六朝における経学の展開
4．吉田　　純　　六朝時代の経典解釈学
5．小島　　毅　　唐代の礼思想
6．澤田多喜男　　六朝における道家思想の展開
7．高橋　忠彦　　道教思想の形成過程
8．原田　二郎　　道教思想と中国医学
9．丘山　　新　　仏典の翻訳と伝統思想
10．末木文美士　　六朝隋唐思想に与えた仏教思想の影響
11．菅野　博史　　六朝隋唐思想における仏性思想
12．松岡　栄志　　六朝隋唐の伝統思想と文学思想
13．藤本　幸夫　　朝鮮文献よりみた中国伝統思想

東アジア前近代官僚制の研究

主任　池　田

1．福井　重雅　　漢代官吏登用制度の形成と構造
2．尾形　　勇　　中国古代国家構造と官人支配
3．窪添　慶文　　北朝官僚制の構造
4．池田　　温　　隋唐官人制の構造と特質
5．岡野　　誠　　中国律令と官僚支配
6．小島　　毅　　唐宋時代の士人
7．佐竹　靖彦　　宋元時代の官僚制度
8．斯波　義信　　宋代の行政・財政と社会経済
9．小口　彦太　　中国伝統官僚制の解体

10. 西澤奈津子　唐日職員令の構成と性格
11. 大津　透　日唐財政制度の比較と特質
12. 石上　英一　日本律令制の形成と展開

中国宋代の政治経済過程

主任　斯　波

1．斯波　義信　社会・経済過程
2．小島　毅　政治・思想過程
3．溝口　雄三　政治・思想過程
4．J.マクダモット　社会・経済過程

華南の地域社会と地方文学

主任　田　仲

1．田仲　一成　広東の演劇（粤劇，潮劇，恵劇）
2．濱下　武志　広東の経済と地域社会
3．片山　剛　広東の村落
4．戸倉　英美　広東の民謡（山歌）と民話
5．西川喜久子　広東の宗族
6．平山　久雄　閩粤の言語
7．王　嵐　興　閩粤の習俗
8．大里　浩秋　閩粤の秘密結社
9．斯波　義信　閩越発展の地域構造
10．岡本　サエ　閩浙の文人結社
11．丸山　昇　上海・江南の文学的風土
12．大木　康　蘇浙の説唱

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究

主任　濱　下

1．濱下　武志　　17世紀以降東アジア経済の展開―欧米の公私文書分析を含めて―
2．岸本　美緒　　明清期経済の動態と意識の構造
3．上田　　信　　明清契約文書より見た社会関係
4．寺田　浩明　　明清期の契約法慣習の論理
5．臼井佐知子　　清末契約文書の社会経済史的分析
6．リンダ•グローヴ　民国時代公私文書より見た農村経済
7．久保　　亨　　民国時代公私文書より見た経済構造
8．宮嶌　博史　　朝鮮近代公私文書の社会経済的分析

現存する中国絵画の包括的再検討

主任　戸　田

1．戸田　禎佑
2．小川　裕充
3．海老根聡郎
4．嶋田　英誠
5．関口　正之
6．湊　　信幸
7．宮崎　法子

特に専門別の分担を定めず、本年は道釈画に関する検討、調査を重点的に行う。

朝鮮における社会変動と民衆―李朝期から近代まで―

主任　宮　嶌

1．武田　幸男　　李朝後期の身分制とその変動
2．吉田　光男　　李朝戸籍を通じてみた社会変動
3．吉野　　誠　　李朝後期の国家財政と社会変動

4．山内　弘一　　李朝後期の地方財政
5．小川　晴久　　ソンビと実学
6．梶村　秀樹　　1910年代の社会経済変動
7．宮嶌　博史　　土地調査事業と農村構造の変動
8．尹　健　次　　朝鮮民衆運動における民族意識と国家意識
9．馬渕　貞利　　近代朝鮮農村の変容相
10．宮田　節子　　1920年代の地方支配と府・面協議会
11．姜　徳　相　　独立運動における社会主義と民族主義

南アジアにおける社会構造と伝統文化

主任　柳　澤

1．山崎　利男　　北インドにおける社会構造と法
2．辛島　　昇　　南インドにおける社会構造と文化
3．長崎　暢子　　北インドにおける民衆意識と政治的行動
4．水島　　司　　南インドにおける社会変動とカースト
5．中里　成章　　ベンガル農村における経済変動と下層民衆
6．柳澤　　悠　　南インド農村における社会変動と下層民衆
7．奥平　龍二　　ビルマの国家と伝統法
8．石井　米雄　　タイの民族形成と伝統文化
9．井東　　猛　　インドネシアの諸国家と伝統文化

インド古代叙事詩の研究

主任　上　村

1．上村　勝彦　　叙事詩の神話
2．山崎　利男　　叙事詩と古代インドの政治
3．土田龍太郎　　初期ヴェーダ文献と叙事詩
4．原　　実　　叙事詩の宗教

5．山崎　元一　　叙事詩と古代インドの社会
6．渡瀬　信之　　叙事詩と法典

南アジアにおける社会変動と民衆意識

主任　加　納

1．加納　啓良　　インドネシアの社会変動と農村構造
2．土屋　健治　　インドネシアにおける社会変動と民衆意識
3．土佐　弘之　　フィリピン・インドネシアの経済開発と都市民衆
4．古田　元夫　　ベトナムにおける社会階層と民衆意識
5．白石　昌也　　ベトナム農村社会の変動と民族形成
6．友杉　　孝　　タイの社会変動と民衆意識
7．末廣　　昭　　タイにおける資本蓄積と社会階層
8．古賀　正則　　北インドにおける経済変動と下層民衆
9．佐藤　　宏　　北インド米作地帯の経済変動と農民生活
10．竹中　千春　　近代インドの政治と民衆
11．中村　平次　　インド亜大陸における諸民族形成

アジア都市比較の課題と方法

主任　友　杉

1．陣内　秀信　　江戸・東京の都市空間の特質
2．斯波　義信　　中国中近世の都市
3．大木　　康　　中国都市と大衆文芸・芸能
4．生田　　滋　　東南アジア前近代における都市の形成と人口移動
5．清水　　展　　フィリピンの都市とフォーク・カトリシズム
6．友杉　　孝　　タイ・スリランカの地方商業都市
7．坂本　　勉　　近代イラン・トルコ都市の比較
8．鈴木　　董　　近世トルコの都市

9．林　佳世子　　中世イスラムの都市
10．黒木　英充　　近代アラブ都市の構造
11．本村　凌二　　古代地中海都市の特質

アジアのイスラム

主任　板　垣

1．板垣　雄三　　現代のイスラム国家論
2．鈴木　　董　　トルコ・イスラム社会の研究
3．黒木　英充　　都市民衆意識とイスラム
4．松谷　敏雄　　西アジアの基層文化
5．後藤　　明　　歴史的イスラム国家論
6．鎌田　　繁　　イラン伝統文化における宗教思想
7．林　佳世子　　イスラム都市社会の研究
8．加納　啓良　　ジャワ農村のイスラム
9．中村廣治郎　　中世イスラムと政治
10．佐藤　次高　　イスラム社会経済史研究
11．小田　淑子　　初期イスラム社会における法
12．加藤　　博　　近代エジプトの農村社会研究

近代アジア社会研究の方法的課題

主任　濱　下

1．宮嶌　博史　　近代アジアの土地変革―方法的探究―
2．濱下　武志　　近代中国とヨーロッパ
3．山崎　利男　　近代アジアにおける法と社会
4．柳澤　　悠　　南アジア農村研究の方法
5．鈴木　　董　　西アジア政治社会史の方法

アジアの宗教制度と儀礼

主任　山　崎

1．田仲　一成　　道教儀礼と演劇

2．関本　照夫　　ジャワにおける外来宗教と土着主義的統合

3．上村　勝彦　　古代インドの宗教制度と演劇

4．山崎　利男　　ヒンドゥー寺院の財産管理

5．鎌田　　繁　　イスラム宗教儀礼の構造

C 定例研究会

昭和61年度定例研究会

6月5日 （汎アジア部門）

報 告 部門の研究概況 友杉 孝

研究発表 東南アジア経済の現状と経済学 原 洋之介

報告者はまず，東南アジア諸国（特にアセアン諸国）の経済が過去20年強の工業化によって現在ひとつの転換点に達している事実を指摘した。東南アジア諸国の経済の現状が日本の1930年代のそれに近いという指摘である。ついで，経済のこのような構造変化をどのように認識するかに関して，東南アジア諸国内の経済学者の間で新マルクス主義的従属学派と自由主義的新古典学派とを両極とする論争がおこっていることを報告した。この論争は，東南アジア諸国の経済学者自身の手による本格的東南アジア経済研究のはじまりになるのではないかと指摘した。最後に，西欧とはちがった経済発展の経験を持つ日本の経済学者としてこの論争に何が貢献できるかについての案を提示した。

討論では，東南アジア諸国の経済学の現状と，韓国等東アジアと東南アジアないしインド等南アジア諸国の経済学の類似点，相違点が議論された。

討 論 加納啓良

司 会 猪口 孝

9月18日 （東アジア部門Ⅰ）

報 告 部門の研究概況 宮嶌博史

研究発表 寧波商人集団の系譜と経済環境 斯波義信

—長江下流経済史の事例—

農業経済・手工業史など超マクロのレベルで扱われてきた問題を，より精緻な研究とするために，近代への適応に成功した海洋型の商人集団を出した寧波を取り上げる。人口問題として，1700年以降の耕地の拡大が人口の増加に追いつかなかったこと，中心は周辺と比べ人口増加率が低く，発展限界があったことを述べ，資源問題として，明末までに潜在的な資源が開発されつくしたことを明らかにし，以上の結果，人材輸出がおこなわれたとする。

寧波からの移出の動向を地方誌・族譜に基づいて分析すると，都市部と並んで，市場網が成熟していた東南の平野部から上海へ出て行く者が多いことが明らかとなる。その背景として，商業的農業に馴染んでいたことが考えられる。明代から清代になると，寧波の科挙の登第率が下がり，それに対応して商人としての人材輸出へ傾斜していったとみられる。

討論の中で，寧波商人の発展の理由を出身地に求めるだけでなく，吸収地も考察する必要があること，寧波商人の行動様式などについて，質疑応答がなされた。

討　論　濱下武志
司　会　宮嶋博史

10月16日　（東アジア部門Ⅱ）

報　告　部門の研究概況　鎌田茂雄

研究発表　五臺山仏教の現状　鎌田茂雄

昭和60年８月下旬から約二週間に亘る中国五臺山の仏教関係の文物の現地参観に基づき，五臺山の寺院群の概況・文物の保存管理状況等について報告がなされた。かつて360あった寺院は，現在124の寺廟がある。その内訪問したものについて，スライドを用いて説明をおこなう。六朝から唐にかけての文物もすくなくなく，本格的な調査をおこなえば画期的な文物が発見される可能性がある。しかし，調査のためには同じ地点に長期間滞在する必要があり，現在では大きな困難がつきまとう。今回の現地参観において，日本の

留学僧・霊仙三蔵法師（822年ごろ毒殺されたとされる）ゆかりの霊境寺を発見することが出来た。

討論の中で，文物管理の実情・復元の方法・僧呂の生活などについて質疑応答がなされた。

討　論　戸田禎佑
司　会　蜂屋邦夫

11月20日　（南アジア部門）

報　告　部門の研究概況　柳澤　悠

研究発表　カーストと地域社会　松井　透

—北インド・メーラト県の事例—

イギリス人エリオットの手により利用価値の高い資料が多く残されたメーラト県について，地域社会を様々な視角から分析し，インドには村を超えた社会的なつながりが存在しないという通説を批判する。１８３５年～３８年の地税取り決めのための調査報告では，県は境界線で囲まれたものではなく，村名を集めたリストとして示される。イギリスの行政政策が村を直接に把握しようとしたものであり、結果として村と村を結びつける組織を無視するものであったことを，そこから窺うことができる。県内で廃村と再建村との分布状況を分析すると，カースト分布と村の荒廃程度との間に相関関係が見られる。このことは，村を超えたカースト組織（カップ）が，村落間・カップ間・地域間の問題を解決する機能をもち，地域の自衛力を高めていたことと対応する。

討論の中で，カーストと地域社会との関係，マーケット・タウンと地域の関係などについて質疑応答がなされた。

討　論　友杉　孝
司　会　上村勝彦

12月11日　（西アジア部門）

報　　告　　部門の研究概況　　鈴　木　　董

研究発表　　エルサレム問題の歴史的考察　　板　垣　雄　三

ならびにその展望

エルサレム問題を「エルサレムの都市の組織と地位，諸宗教の聖地の管理ならびに信者の聖地へのアクセス権をめぐる社会的・国際的紛争」と定義し，その重層的構造・歴史的変遷を解明する。この問題を，まず聖地管理・国際法上の地位・パレスチナ問題・エスニシティー問題・都市行政の各層に分けて分析を加える。ついで，歴史的な段階にわけ，1947年の国連決議に基づくエルサレム市国際化計画が48年のイスラエル国家成立と共に棚上げされ，六日戦争（67年）の結果，市全域がイスラエルの掌握するところとなり，80年「恒久首都化法」が制定されるという漸進的既成事実化の過程を述べる。エルサレムは，ユダヤ教・キリスト教・イスラームの各宗教にとって象徴的な意味を持つ。この特殊性をふまえ，将来ヴィジョンとして，一つの都市が二つの国家の首都となるプラン，紛争解決にかかわるべき諸宗教の発議に基づく複合「バチカン市国化」プランの二つを提起する。

討論の中で，国際化ならびに主権国家にどのような意味を与えるかという問題などをめぐり，議論が行われた。

討　　論　　松　井　　透

司　　会　　松　谷　敏　雄

昭和61年度退官記念最終研究発表会

62年２月20日

(1)　松井　透教授研究略歴紹介　　柳　澤　　悠

研究報告　　ジャタウリ村と「文明の統治」　　松　井　　透

研究中のテーマの一つを取り上げて，最終報告とする。メーラト県に属するジャタウリ村に関する1830年代の英人書記の手に成る資料を分析し，当時

の村の姿を解明しようとした結果，村の面積は現在とほとんど変わらず，耕地面積もほぼ同じであるが，灌漑地の割合が増加していることが明らかとなった。30年代，村の未耕可耕地は少なく，目いっぱい耕されていたものの，灌漑の条件は良くなかった。農作形態を見ると，サトウキビの栽培面積が多く，とぼしい灌漑地をそれに集中していたことが分かる。これは，村が市場に近く商品作物生産に傾斜していたことを示す（農作形態から農民が何を食べていたかを推定すると，カリーフ期には雑穀と豆のチャパティと乳製品，ラヴィー期には麦類を主としていたと思われる）。ジャタウリ村への地税はきわめて高い。都市近郊農村は高い地税を課せられ，蓄積の可能性のあるところをねらいうちにしている収奪であることが明らかとなる。これは刈り分け地代に基礎を持つ伝統的な地代に対して課税しているために生じたことであり，地税は地代に対して課税することが合理的であるというイギリス統治者の政策原理が破綻していたことを示す。これは地代論が「文明の統治」を支えた一つのイデオロギーでしかなかったものと理解すべきであろう。

⑵ 中根千枝教授研究略歴紹介　　関 本 照 夫

研究報告　文献学と実態調査　　中 根 千 枝

文献だけに頼る異文化の研究への疑問は，東洋史学科において中国史研究者が語る中国と，自身が北京での生活の中で知っている中国とが異なることを感じたところから生じた。チベット研究において，実態への理解を基礎に持つ必要を痛感，チベットへ入るためにインドに赴き，そこで実態調査を体験した。その後，イギリスに留学して，自分がやりたいものが社会人類学であることが分かって来た。実態調査に基づく研究の特色として，歴史学と同様に良質のデータの重視があげられる。良質のデータの獲得の方法としては，特定問題の分析のためであっても，背景となる生活体系を把握していなければならないこと，そのために長期滞在が必要であることなどが挙げられる。フィールド・ワーカーとしての資質としては，人間に対する興味を持ち続け

ていること，理論的な概念を持つこと，叙述にすぐれていることがある。実態調査に拠るミクロな研究は２００人程度のコミュニティーが限界であり，村落が大きな社会のネットワークの中にとらわれていることを分析するためには，歴史学とは異なる形で，文献を用いる必要がある。例えば思考プロセス分析のために文献を用いるなどの方法が考えられる。

⑶　関　寛治教授研究略歴紹介　　猪口　孝

研究報告　　地域研究のグローバルな再編成に向けて　　関　寛治

現在までの著作は「太平洋戦争への道」（昭和38年）でのアジア革命から満州事変に至る政治過程の歴史的実証研究から，ロシア革命の東アジアへのインパクトを扱った「現代東アジア国際環境の誕生」（昭和41年）など東アジア・東南アジアの地域的な問題や国際関係を扱った研究，日米関係に焦点をあてた太平洋地域の全域的な国際関係に関わる研究，そして国際政治学・平和研究の原論的な研究にまで及んでいる。戦後日本の国際政治学や平和研究の分野では，たえず正統派理論への挑戦をおこなう役割を果たしてきた。

これらの多様な研究を取り上げる上で，一貫して研究の基礎には，次のような三つのパースペクティヴの提出という課題があった。第一に，正統派の国際政治学理論を批判する際，常に辺境・周辺（periphery）からの中枢・中心（center）への異論の提出が立脚点となった。第二に，各国家の政策から定義されがちの「地域研究」に対抗しうる，学際的かつグローバルな「地域にまたがる（inter-regional）」研究をおこなう必要があるというパースペクティヴを提起した。第三は，アメリカに特有の歴史と状況によって規定されたパラダイムに拘束された政治観と，それに基づく近代化論，およびその延長線上にある比較政治学の理論枠組みを有効に批判していくというものである。

こうした観点からの，具体的な研究活動にとどまらず，研究環境やコンピューターによる情報収集・シミュレーション及びその教育面での制度化に

も尽力してきた。それによって日本の大学における国際政治学・地域研究・平和研究の場も少しづつ確立してきたし，国連大学の共同プロジェクトなどを通して国際的なネットワークも形成されてきたといえよう。

昭和62年度定例研究会

6月25日　（南アジア部門）

報　　告　　部門の研究概況　　柳 澤 悠

研究発表　　太平洋南西部における国際環境の推移と武力分離運動　　土 佐 弘 之

西ニューギニア（イリアン・ジャヤ）と東ティモールでのナショナリズムが辿った歴史的過程を，特に，この地域を取り巻く国際関係の推移との関係に重点を置きながら，検討していった。西ニューギニアの場合，イギリス，ドイツなどによる太平洋地域の帝国主義的分割から始まって，太平洋戦争，植民地の崩壊，インドネシア・ナショナリズムの高揚といった環境の推移の下で，オランダ主導の非植民地化が進められ，それと平行してパプア・ナショナリズムが成長していった。東ティモールの場合，ポルトガル，オランダによる分割画定から始まって，長い停滞を経て，ポルトガル本国の長期権威主義体制の崩壊に伴う，非植民地化と前後して，ティモール・ナショナリズムが急速に成長していった。いずれも，結局インドネシア・ナショナリズムに併呑されていき，武力分離運動に転化していった。こうした過程は，世界政治経済システムの自己組織化（再編成）に伴う，周辺的下位サブ・システムでの調整過程及びその調整摩擦という側面を持っていることを論じた。

討　　論　猪 口　　孝

司　　会　上 村 勝 彦

9月17日　（東アジア部門Ⅱ）

報　　告　　部門の研究概況　　尾 上 兼 英

研究発表　白猿物語について　尾上兼英

江戸時代の国学者荷田在満に「白猿物語」という作品がある。これは，嵐に遇って猿の棲む島に漂着した男が，その長のめすの白猿と夫婦の契りをかわし，子までもうけたが，近くを通りかかった船に飛び乗ったところ，白猿は船を追いかけ，遂に子猿を抱いたまま千尋の海の底へ身を投げた，という話である。従来国文学界にあっては，この作品は中国小説にもとずいているといわれてきた。本報告では，中国の文学作品にあらわれた猿の形象（好色の猿と情に厚い猿の二側面）を整理し，さらに中国と日本における仙界漂流譚の系譜を探ることによって，この作品が，中国に材源をもつとしてすませるわけにはいかないことを明らかにした。

質疑，討論では，国学者の在満がこのような作品を書いた意図，作品の江戸文学史上での位置づけ，中国絵画における猿の形象などとともに，この作品における中国小説の影響の有無，などの諸点につき，活発に議論された。

討　論　大木　康
司　会　戸田禎佑

10月15日　（東アジア部門Ⅰ）

報　告　部門の研究概況　松丸道雄
研究発表　郊祀の変遷と礼制議論　小島毅

中国において皇帝は「天子」の性格をもち，天の祀りは重要な仕事であった。漢代に整備された郊祀制度は，その後たびたび修正されながらも清末まで存続する。その変遷の過程を追いながら重要な制度改革，具体的には天地を分けて祭る問題や天地とともに祭る祖先神の性格をめぐる論争が報告された。そして，そうした論争における対立点・相違点を明確にすることにより天についての考え方が時間的にどのように変化したかを分析したり，中国以外の社会における国王祭祀との比較を通じたりして，中国的宇宙論の考察及び帝国秩序を支えた思想的基盤の解明を試みることができるのではないか

という見通しが述べられた。

これに対し，国王の祭祀方法に関してこれほど大規模かつ長期的な論争がなされる社会の方が珍しいこと，国家次元の祭祀と民間の祭祀とをどう結びつけて捉えていくか考えるべきこと，「天」を至上神とする中国的思惟の特殊性に注意すべきことなどの指摘があった。

討　論　池田　温
司　会　斯波義信

11月19日　（西アジア部門）

報　告　部門の研究概況　松谷敏雄

研究発表　19世紀シリアの都市騒乱　黒木英充

「モザイク社会」という用語は，現代のシリア地域で見られる宗派的対立・紛争を説明する際にしばしば用いられ，近代史研究の場においても異宗派間の対立が最初から前提とされてきた。これに対して近年「オリエンタリズム」批判と結びついた理論的反論がなされている。今回の発表では，シリアの代表的都市アレッポを議論の場として取り上げ，19世紀前半の近代化の時期をはさんで起きた2つの都市騒乱（1819－20，1850年）の過程の分析を通じて，実証的な「モザイク社会」論批判の提示を試みた。前者の騒乱では宗派的対立の傾向は見られず，別のレベルで成立していた対抗派閥集団も結束してオスマン総督に対して反乱を起こしていたのに対し，後者では，同様の動機で反乱がおこされたにもかかわらず，その過程でキリスト教徒住民に対する襲撃事件が発生した。宗派的対立は近代化によってつくりだされたと言える。

討論の中では，都市民の間に成立していた規範や秩序の概念について，また「モザイク社会」論は「オリエンタリズム」を超えた次元でも問題にすべきことなどが議論された。

討　論　友杉　孝

司　会　鈴木　董

12月10日　（汎アジア部門）

報　告　部門の研究概況　山田三郎

研究発表　マレーシアに浮かぶ村　川崎有三

—潮州人漁村S村をめぐる社会位相空間論—

マレーシアの潮州人漁村S村を例にとり，近代国家の中にある小コミュニティを対象として人類学的／社会学的な研究をする際の問題点を指摘し，発表者が用いている方法としてのシステム論的分析，概念としての社会位相空間論の一端を紹介した。

討論においてはシステム論的分析の実現性と有用性に疑問が出され，また概念としての社会位相空間論のイメージと意味するものについて質問がなされた。

社会学的な対象を分析する際に，自然科学的（数学的・数理的）な分析方法・概念を用いることの意味について意見が交わされ，システム論的分析が目指すシミュレーションの果たす分析的な役割については肯定／否定の両論があった。

発表者の用いている方法や概念は刺激的であるが，まだ不十分なところもあり，これらを有効な道具として用いるには，より一層の具体的な分析例が必要であることが議論された。

討　論　友杉　孝

司　会　原　洋之介

昭和62年度退官記念最終研究発表会

63年２月25日

(1)　鎌田茂雄教授研究略歴紹介　蜂屋邦夫

研究報告　中国・朝鮮仏教と私　鎌田茂雄

中国仏教および朝鮮仏教を研究してから三十年の歳月が過ぎた。私の最初

の学問的関心は中国の華厳思想史であったが，教理学の研究だけでは中国仏教そのものの性格を把握することが困難であると考え，中国仏教史の全体像を理解するため，先ず『中国仏教史』（岩波全書）を書き，ついで『中国仏教史』第一・二・三巻を執筆した。一方，昭和45年以来，中国の仏教儀礼の実態調査をおこない，台湾・香港・東南アジアの華人社会の仏教寺院を訪れた。日中国交が回復した以後は，大陸の仏教寺院，石窟寺，四大仏教霊山などを調査し，また日中仏教学術交流を推進するために努力を続けた。一方，昭和45年以来，朝鮮仏教の実態調査のため，しばしば韓国の寺院を訪問した。昨年は朝鮮民主主義人民共和国の寺院を参観した。昭和62年，『朝鮮仏教史』（東京大学出版会）を刊行することができた。

⑵ 尾上兼英教授研究略歴紹介　　田 仲 一 成

研究報告　明代小説にみる民衆のモラル　　尾 上 兼 英

本報告では，中国の白話小説の中の四大奇書『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』を主たる題材として，中国の民衆のモラルについて考察した。

はじめに，それぞれの作品の登場人物の類型的な描き方に触れ，そこにも上に立つ者が無能であった方が都合がよい，という民衆の世界観の反映が見られること，また古い『三国志』にある転生譚が，血の債務は血で返すという民衆の考え方にもとづいていること，そして，『三国』『水滸』の中の義兄弟というものが民衆世界で持つ意味について述べた。続いて，『三国』『水滸』『西遊』が，戦乱など非日常的な場面の男の世界を描いたのに対し，『金瓶梅』は，日常的な家庭の世界（その中での女の戦い）を描いている点で相違すること，また，士の側から見た小説について，「誨淫誨盗」という非難，士人の書きかえによる小説の変質に触れた。最後に，儒教社会に対する民衆の抵抗のあり方について整理し，検討を加えた。

D　科学研究費による研究・特別事業費による現地研究

海外学術研究〔昭和61・62年度〕

○西アジア先史遺跡調査（第１次）

（海外学術研究　現地調査）（昭和62年度）　代表者　松谷　敏雄

シリア東北部のハッサケ州の州都ハッサケ市の北20kmにある遺跡テル・カシュカショク２号丘において発掘調査をおこなった。

○中国文化に占める道教の位置と現状についての総合的調査・研究

（海外学術研究　予備調査）（昭和62年度）　代表者　蜂屋　邦夫

1987年10月16日から12月５日にかけ，本調査でカヴァーする北京・山東省（烟台・掖県・牟平）・上海・杭州・南昌・武漢・成都・西安の各地をまわり，関係機関ならびに現地研究者と打ち合わせをおこなった。

重点領域研究

○東アジアの発展モデルⅡ：政治と国際関係

（重点領域研究）（昭和62年度）　代表者　猪口　　孝

中国，台湾，韓国，ベトナム，日本の内政と外交を，1980年代の「太平洋のダイナミズム」という国際環境の中でとらえ，東アジア政治体制の比較分析的枠組から，体系的に研究をすすめた。

総　合　研　究

○イスラームの都市性に関する研究

（総合研究（Ｂ））（昭和62年度）　代表者　板垣　雄三

昭和63年度より３ケ年計画で実施される予定の重点領域研究「比較の手法によるイスラームの都市性に関する総合的研究」の準備として，代表者他21名の研究分担者による研究会の開催等をおこなった。

一 般 研 究

○経済利益の政治的表現の実証研究
（一般研究（Ｂ））（昭和60・61・62年度） 代表者 猪口 孝

経済利益がどのような形で政治的に表現されているかを，国会議員のキャリア分析や意見調査によって解明した。

○アジア・アフリカ諸地域の社会・政治変動とイスラムに関する比較研究
（一般研究（Ｂ））（昭和61・62年度） 代表者 板垣 雄三

アジア・アフリカ諸地域における社会・政治変動を，文化・思想過程，価値意識の変化にまで視野を拡げて検討する共同研究を実施することにより，学際的な比較「地域研究」の試みとしてこれをおこなった。

○南インド・ラルグディ郡100村の土地台帳（1865－1925）の数量的分析
（一般研究（Ｂ））（昭和61・62年度） 代表者 柳澤 悠

南インドの１つの郡の60村の土地台帳の内容を電算機によって機械可読の形とし，それを村落ごとに集計・分析した。分析は，19世紀後半から20世紀前半にかけての南インド農村社会の変容を明らかにすることを目指し，その成果は，『20世紀初め南インドのカーストと土地保有構造の変動』というタイトルで刊行された。

特別事業費による現地研究〔昭和61・62年度〕

○中根　千枝

昭和61年11月30日から12月28日に至る期間，インドの北境地方におもむき，チベット系民族とイスラムの隣接地域にみられる社会・文化の諸相を調査した。

○猪口　　孝

昭和62年３月12日から４月10日に至る期間，中華人民共和国および香港におもむいて，改革・開放によって経済発展を促進しようとしている中国の内政・外交の現状について調査をおこなった。

○田仲　一成

昭和62年８月25日から９月27日に至る期間，中華人民共和国の東南沿海各地と香港におもむき，福建・広東地方劇に関する調査をおこなった。

○原　洋之介

昭和63年１月23日から２月11日に至る期間，パキスタン，マレーシアにおいて，「イスラム経済論」の現状にかかわる調査をおこなった。資本主義体制ともまた社会主義体制とも異なるイスラム経済体制論の理念とその実態について，ある程度観察することができた。

E 本学内教育参加

〔昭和61年度追加〕

（氏 名）	（学 科）	（講義題目）
（1）文 学 部		
柳 澤 助 教 授	東洋史	近現代インド経済史
（2）法 学 部		
鈴 木 助 教 授	特別講義	中東の政治
（3）全学一般教育ゼミナール		
上 村 助 教 授	第2・4学期	ヒンドゥー教の神話

〔昭和62年度〕

1. 大学院

（氏 名）	（専門課程）	（講義題目）
（1）人文科学研究科		
尾 上 教 授	中国語中国文学	説唱文学研究
田 仲 教 授	中国語中国文学	西廂記
斯 波 教 授	東洋史学	宋代社会経済史研究
池 田 教 授	東洋史学	中国古代寺院文書研究
松 丸 教 授	東洋史学・中国哲学	殷周青銅器銘文研究
濱 下 助 教 授	東洋史学	中国近代経済史研究
宮 嶌 助 教 授	東洋史学	近代朝鮮経済史研究
山 崎 教 授	東洋史学	インド法制史研究
蜂 屋 教 授	中国哲学	東晋時代の思想
鎌 田 教 授	印度哲学印度文学	中国仏教文献講読
上 村 助 教 授	印度哲学印度文学	サンスクリット戯曲研究

板　垣　教　授	宗教学宗教史学(イスラム学)	現代イスラムをめぐる諸問題
鎌 田 助 教 授	宗教学宗教史学(イスラム学)	イスラム思想文献研究
戸田教授•小川助教授	美術史学	中国絵画史研究

（2）法学政治学研究科

猪 口 助 教 授	政治学	日本の政治・アジアの政治
鈴 木 助 教 授	政治学	中東政治変動論研究

（3）経済学研究科

柳 澤 助 教 授	応用経済学	インド経済論

（4）社会学研究科

関 本 助 教 授	文化人類学	民族誌の方法
松　谷　教　授	文化人類学	メソポタミア先史学

（5）総合文化研究科

松　谷　教　授	地域文化	アジア地域文化構造論他
板　垣　教　授	地域文化	アジア地域文化構造論他
板　垣　教　授	地域文化	現代イスラム論

（6）理学系研究科

友　杉　教　授	地理学	地誌研究Ⅲ
友　杉　教　授	地理学	地誌学演習Ⅲ

（7）農学系研究科

山　田　教　授	農業経済学	国際農業論特論・演習
原　　助 教 授	農業経済学	国際農業論特論・演習

2. 学　部

（氏　名）	（学　科）	（講義題目）

（1）文学部

鈴 木 助 教 授	一般講義	西アジアの社会と文化
戸　田　教　授	美術史学	美術史学特殊講義